

TOSHIBA

Leading Innovation >>>

FUTURE DESIGN

vol. **50**

2 0 1 7

安全で快適なエレベーターの
未来をデザインする

人と人が
つながる「まち」

コミュニティを育む
多世代共生の可能性

特集・交通と都市の未来形

東芝エレベータ株式会社

TOSHIBA ELEVATOR AND BUILDING SYSTEMS CORPORATION

FUTURE DESIGN

vol. 50
2017

安全で快適なエレベーターの
未来をデザインする

CONTENTS

- 03-09 特集●交通と都市の未来形
人と人がつながる“まち”
コミュニティを育む多世代共生の可能性
- 10-13 エレベーターの製造現場を
まるっと探検!
- 14-15 連載●お江戸の楽しい歩き方 第6回
柴又・矢切周辺
- 16-17 連載●異国の目から見たニッポン 第3回
ドイツ連邦共和国
ベルリン編
カール・ベンクスさん
- 18-19 連載●がんばる地方都市 第13回
富山県射水市 内川地区
- 20 新連載●コラボで生まれ変わる伝統工芸 第1回
能作
× クラソン・コイヴィスト・ルーネ
今回の逸品 ●テーブルウェア「TSUBAKI」

【表紙解説】

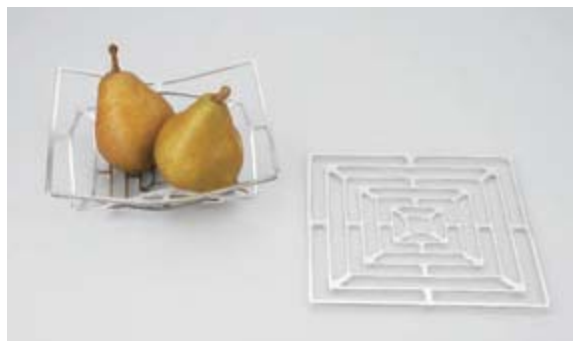


政府は現在、「生涯活躍のまち」と名づけた政策を推進しています。これは、高齢者が健康なうちから移住し、人生の最期まで快適に過ごせるコミュニティを指し、その先駆的モデルとして全国から視察が相次いでいるのが、石川県金沢市にある「Share 金沢」です。Share 金沢の大きな特徴は、高齢者、障がい者、学生、子ども、周辺住民などが“ごちゃ混ぜ”になってつながっていること。さまざまな世代、立場の人々の関わりを通して化学反応が生まれている Share 金沢から、新しいコミュニティのあり方が見えてきます。

（ アンケートにご協力ください ）

『FUTURE DESIGN』vol.50 に対するご感想をお寄せください。20ページでご紹介した 機能作の代表作「曲がる」シリーズから「KAGO-スクエア-M」（サイズ：200×200×3mm）を抽選で10名様にお送りします。

本製品は、同社が長年培ってきた鋳造技術をもとに、^{スズ}錫100%で製作されました。純度100%の錫は柔らかいという特徴があり、この製品も、自分の手で引っ張ったり、曲げたりすることで、かご状に変形することができます。かご状にしてパンやフルーツのバスケットにしたり、引き伸ばして逆さにして照明シェードにしたりするなど、自由なアレンジをお楽しみください。



- 応募方法
同封のはがきまたはFAX用紙、E-mailでご意見をお送りください。
- 締め切り
2017年8月31日到着分まで有効。

東芝エレベータ株式会社 FUTURE DESIGN

vol.50 2017

2017年5月31日発行 発行 東芝エレベータ株式会社 広報室
〒212-8585 神奈川県川崎市幸区堀川町72番地34
電話 (044)331-7001
URL <http://www.toshiba-elevator.co.jp>
E-mail elevator@po.toshiba.co.jp

制作 有限会社イー・クラフト デザイン 手塚みゆき
印刷会社 株式会社メディア グラフィックス

特集 ● 交通と都市の未来形

人と人が つながる“まち”

コミュニティを育む 多世代共生の可能性

グループホーム内に保育園を併設した施設や、
一般住宅とサービス付き高齢者向け住宅を混在させた
集合住宅など……。

世代間の交流を活性化することをテーマとした
高齢者施設や集合住宅が増えてきた。

今、なぜ、こうした施設が広がりつつあるのか。

今回の特集では、世代や立場が異なる人々が交流する
成功事例を複数紹介し、

新しいコミュニティを育む多世代共生の可能性を
探ってみよう。



障がい者福祉施設が出発点

美大生の作品で飾られた駄菓子子の売店に並ぶ学童保育の子どもたち。

レジを打つのは知的障がいを持つ青年とサービス付き高齢者向け住宅に入居している高齢者だ。2014年に石川県金沢市郊外にオープンした「Share金沢」は、さまざまな立場の人がごく当たり前に分け隔てなく活動する「ごちゃ混ぜ」のまちだ。

Share金沢の運営母体は石川県内で多くの福祉施設を運営する社会福祉法人佛子園。戦災孤児を寺の本堂で預かったことをきっかけに知的障がい児の入所施設を1960年に開設。障がい者雇用にも注力して、1998年オープンのレストラン日本海倶楽部では知的障がい者が地ビールの製造に従事している。

「障がいのある人たちが働くことが地域起こしの力になる」と語るのは佛子園の雄谷良成理事長。その後の事業展開についても「卒園する子どもたちの行く末を考えて必然的に増えていった」という。

廃寺の引き受けが転機に

事業を「ごちゃ混ぜ」で行い始めたきっかけは、県南部の小松市にある廃寺「西園寺」を引き受けたことだった。福祉施設の建設に不安感を持つ地元住民に対し、雄谷氏は寺の建物を福祉サービスの拠点として整備すると同時に、地域住民が集まることのできる施設として改装したのだ。



2



1

周辺住民は無料で天然温泉が利用可能。温泉はコミュニケーションの場になるとともに、入湯履歴をチェックすることで住民の健康状態も確認できる。

お互いの姿が見えるよう、向かい合わせに建てられた児童入所施設とサービス付き高齢者向け住宅。建物間の路地は「すれ違う時に肩が触れ合う距離感」を意識して設計。

3

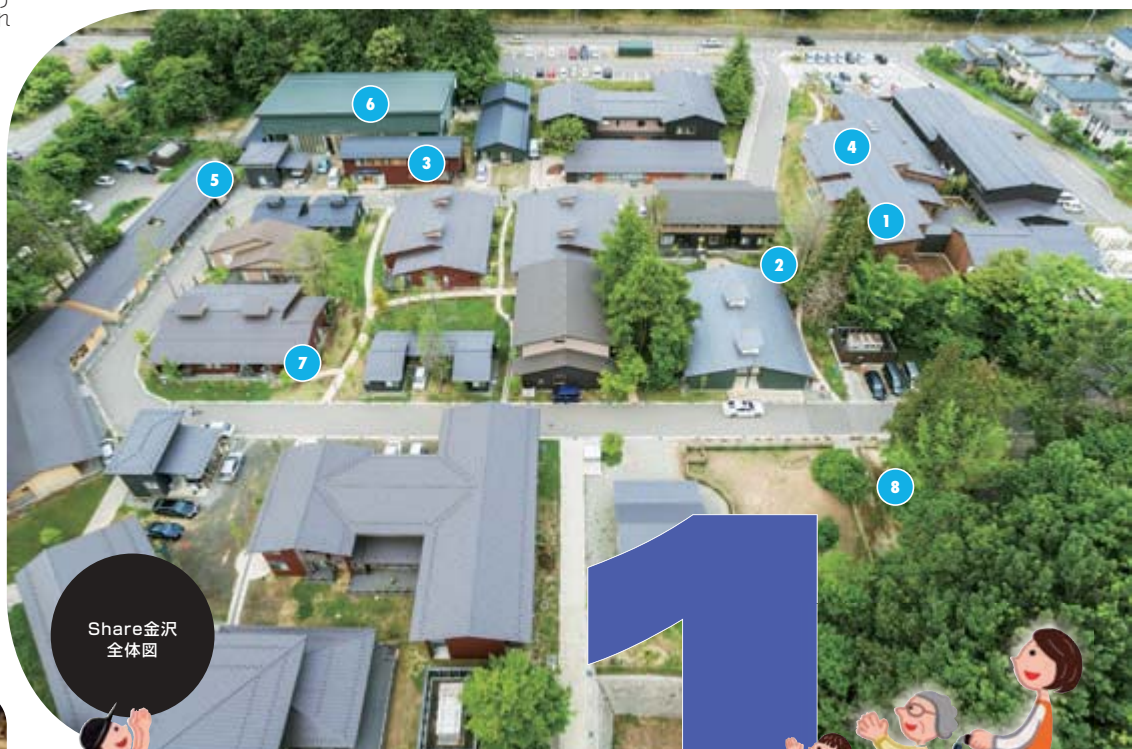


NPO法人ガイア自然学校では、Share金沢の森や施設をフル活用して遊びをサポートする放課後自然教室を共同運営している。金沢大学の学生もボランティアで参加。

4



地域住民の直売スペースでは、生産者が自分でバーコード付き値札を打ち出して野菜などを販売。売り上げの1割はShare金沢に。



Share金沢
全体図



case

障がい者福祉施設と温泉を軸とした “ごちゃ混ぜ”のまち

障がい者福祉施設を地域に向かって開くことで
住民が集うまちに変えた「Share金沢」。

“ごちゃ混ぜ”のなかから新しい人と人とのつながりが生まれている。





社会福祉法人佛子園 理事長

雄谷 良成氏
(おおよ・りょうせい)

“ごちゃ混ぜ”が生む 居心地のよさ

福祉は今、高齢者福祉、障がい者福祉、児童福祉が縦割りで行われています。しかし、障がい者施設の建設が、逆に障がい者の排除につながるなどの弊害が明らかになり、世界の福祉先進国は“ごちゃ混ぜ福祉”に向かっています。

ポイントの一つが“役割”ではなく“機能”を捉えること。重度の障がいで見“役割”を持っていないように見える人も社会の一員として機能しているという考え方です。西圓寺に集まる皆さんは「障がい者や認知症の方や子どもたちが一緒にいて居心地がいい」とおっしゃいます。白山市にある「行善寺（ぎょうぜんじ）」のウェルネスジムも、子どもや障がい者が一緒にトレーニングをします。ダウン症の子に「すごいねー」と話しかけられたりするのですが、抜群の利用率です。

高齢化社会を危惧する声もありますが、僕は逆に、障がい者や高齢者が社会的にもっと必要とされるようになる面白い時期だと思っています。元気な高齢者のエネルギーをどう活かすか、チャンスの時代ではないでしょうか。



行善寺では温泉、ウェルネスジム、高齢者施設などが1つの建物にまとめられている。

交流促進を目的とした仕掛けの一つに、住民の自発的な活動がある。Share金沢には月30時間のボランティアを条件とした格安の学生向け賃貸物件があるが、何をするかは学生自身に任されている。

「我々はあくまでも黒子。指示を出すのは簡単ですが、自分で考えて行う行動は一段レベルが高い。そこで、我々が発言せず、相手に語らせる技術も必要です」と語る雄谷氏。住民主体の「ごちゃ混ぜ」に今、注目が集まっている。

住民がつくるまち

「地域の人たちに障がい者や認知症の人たちと関わる機会があれば反対運動は起こらない」と語る雄谷氏は、温泉を掘り、地域住民が物を売る市を開き、ご飯を食べたりお酒を飲んだりする場をつくった。廃寺だった西圓寺は賑わいを取り戻し、周辺世帯数も55から71へと増加した。



若松共同売店はShare金沢に住む高齢者や学生がオーナー。学童保育のおやつの時間には駄菓子コーナーが子どもたちでいっぱい。



七夕祭りでは地域の小学生が短冊を持ち込んで飾り付け。翌日は自主的に掃除を行い、きれいに片付ける。



全天候型グラウンド「S-STADIUM」では、フットサルのほか、トランポリンや音楽のライブ演奏会なども開催されている。



スタッフからの提案で始まったアルパカ牧場。障がい者が飼育を手伝っている。

「ごちゃ混ぜ型建築」を 計画する難しさ



建築家
武蔵野大学工学部
建築デザイン学科 講師
松田 達氏
(まつだ・たつ)

近代の建築計画は、居住者をそれぞれ適切な地域に住み分けさせ、複雑なものを整理する「ゾーニング」の考え方で進められてきました。そうしたなかでShare金沢はさまざまな人々が複合的に住むことで、ゾーニングによって失われてきた「気持ちよさ」を取り戻す、非常に興味深い取り組みだと思います。

1つの建物に複数の機能を配置した複合型施設は増えています。しかし、そこから一歩踏み出し、異なる機能間での交流を促す「ごちゃ混ぜ型」の施設は多くありません。実は「ごちゃ混ぜ型建築」を計画するのはかえって難しいんです。可能性が限定されやすいゾーニングの手法と違って、機能の組み合わせはたくさんありますよね。そのなかで何を選べば交流が成立するのかを予測するのは非常に困難ですし、そもそも偶然発生するようなハプニングこそ面白さがあります。「ごちゃ混ぜ型建築」には、「予測できない事態を計画する」といった矛盾した設計が求められているのです。

Share金沢は、長い間障がい者福祉を続けてきた経験をもとに軸足をしっかりと据え、福祉の世界で日常的に起きる出来事を詳細まで想定したうえで、地域に向かって開いた設計にすることで「ごちゃ混ぜ」に成功しているのではないかと思います。



屋上菜園は、車いすに乗ったまま水やりなどができる高さにつくられている。レモンや山椒、キュウリなどのほか、認知症によいとされる赤ワイン用のブドウ（カベルネソーヴィニヨン）も植えられている。

グループホーム個室のベランダは、いざという時にそのまま降下できるレスキューベランダになっているが、避難器具と認められなかったため、別に避難ハッチも設けられている。



文京ひかりの里の管理者・伊藤和秀氏は娘さんを事業所内保育所に預けている。



文京
ひかりの里



case

相互交流を通して

高齢者も子どもも元気いっぱい



高齢者は子どもとの触れ合いで活力を取り戻し、
子どもは高齢者との触れ合いで社会性を身につける。
「文京ひかりの里」はそうした一挙両得を狙った施設だ。



取り組みの原点となった
三重県桑名市の「ひかりの里」。

桑名で始めた幼老複合施設

「それまで一方的にお世話される立場だった認知症の高齢者が、子どもたちと触れ合うことで表情が生き生きと変わってくるんです」と語るのは、事業所内保育所を併設した東京都文京区の幼老複合型グループホーム「文京ひかりの里」の多湖光宗理事長だ。

「子どもを育てるには村1つが必要だ」という外国の諺（ことわざ）があります。専門家が同じ年齢層をまとめて育てるのは効率的かもしれませんが、それで社会的な人材が育つかどうかは疑問です」と語る多湖氏は、まず、郷里の三重県桑名市に「ひかりの里」を開き、グループホームと学童保育を組み合わせる試みを始めた。

当初、学童保育に通う児童のなかには、宿題をしない子どももいた。しかし、そんな子どもがグループホームの高齢者から、時に叱られながら勉強を教わるうちに好きな科目が見つかり、テストで満点を取るといううれしい出来事も起きた。

高齢者の活力源は
子どもの歓声

2011年6月、多湖氏は学生時代から勤務医時代を過ごした文京区がグループホームを公募していることを聞く。公募締切まで2カ月を切っていたため、土地は現地確認もそこそこに現金で購入し、大急ぎで申請図面を作成した。

2階に併設された保育所は、グループホームとの仕切り扉を開放すると、ハロウィン運動会やクリスマスパーティーなどの合同イベントを行うことができる。一緒にテレビを見たり、おやつを食べる姿を見てもらったりといった交流も日常的に行われている。

高齢者も子どもたちを見ながら昔を思い出し、「自分の子育てはこうだった」「このくらい歳の子はこれが心配」と話が広がっていく。

職員は子どもと高齢者の両方を理解してつなげるという重要な役割を担うため、文京ひかりの里では、保育士と介護福祉士の両方の資格を持つ人が多い。管理者の伊藤和秀氏も「両方のことを知っている」と現場での見方も変わります。今後、うちのような施設は増えますから、学生さんは介護と保育、両方の資格を取るといいと思います」と語る。

人生の達人である高齢者と遊びの天才である子どもが交流するメリットを活かした取り組みの今後に期待したい。



社会福祉法人自立共生会 理事長
ウエルネス医療クリニック 院長

多湖 光宗氏
(たこ・みつむね)

共生社会の実現には 縦割り行政の改革が必要

高齢者向け施設と子ども向け施設を1つにまとめる試みは全国500カ所以上で進められていますが、その大半はコスト削減が目的で、積極的な交流はほとんど行われていません。障害となっているのは自治体の縦割り行政です。

文京ひかりの里でも、高齢者と子どもの入口を分けることや、避難経路も別に確保すること、スタッフを共有してはいけないことなどの指導がありました。内閣府は「共生社会の実現」などの方向性を打ち出していますが、地方自治体は一部を除いて遅れているように感じます。

状況を変えるには選挙などを通して行政を変えなければいけません。そのためにも共生の有効性を広く知らせていきたいです。高齢者への効果は示せたので、今後は高齢者と交流した子どもたちがより社会性のある人材に育つのか、しっかり見守っていきたいですね。



高齢者の散歩を地域の見回りに活用しようとひかりの里で始まった防犯パトロール。



2カ月に1度くらいのペースで交流会が行われている。高齢者は子どもたち以上にノリノリで楽しんでいるという。



グループホームの調理場。入居者が料理に対するアドバイスをくれることも。



保育所とグループホームを仕切る扉は、締め切ることも完全に開放することもできるようにつくられている。



高齢者と子どもの触れ合いは日常的に行われている。

1つの機能のために建物を建てる時代は終わりを迎えています。今後も、開放性を保ち、高齢者と子どもと地域の方が共生できる魅力的な空間づくりに挑戦していきたいですね。



「幼・老・食の堂」は、地域の食堂を取り巻くように空間が「こちゃ混ぜ」に配置されている。

東京都品川区に計画中の「幼・老・食の堂」では、高齢者施設と保育所をつなぐ1階中央部に、地域の方も利用できる食堂を配置しました。外階段を登れば、誰でも立ち寄れるまちの菜園もあります。

最初は高齢者が集まるサロンになると想定していたのですが、目をつけたのは意外にも子どもたちでした。「何ができるの？ カフェ？」とパンパン入ってきて集うようになったんです。その後、夜まで残って1人で夕食やお菓子を食べている子どもがいることに気づいた民生委員さんが手を挙げてくださり、子ども食堂が始まりました。今は週3日食堂が開かれ、子育てママさんや障がい者、近隣の高齢者の方も集まる場になっています。「開放性」とともに「食」も重要なキーワードだと感じます。



建築家
一級建築士事務所 teco 共卒
アリソン 理恵氏
(ありそん りえ)

建築家
一級建築士事務所 teco 共卒
金野 千恵氏
(こんの ちえ)

「食」をキーワードに地域へ
向けて開いた高齢者施設



街ing 本郷の副代表理事を務める和菓子屋店主・栗田洋氏の店先で。学生はすっかり地域に溶け込んでいる。



元書生の西牟田章士さん
(都市工学専攻)



現役書生の山部翔太郎さん
(森林科学専攻)



共同トイレの昔ながらのアパートだが、「活動の権利」が付加価値となり、今は学生がひっきりなしに入居する。

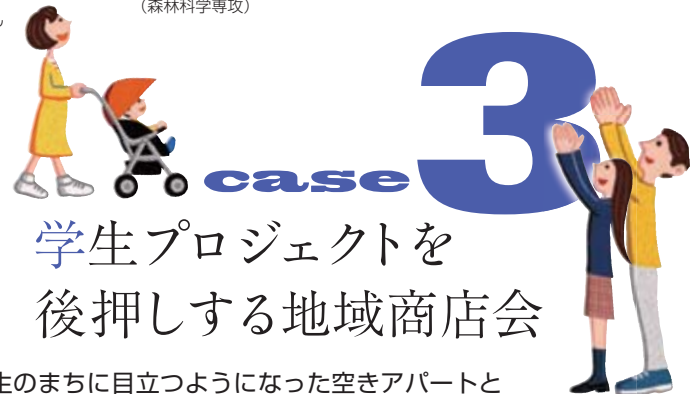


街ing 本郷は高齢者と学生が同居するプロジェクトも進めており、両者が出会い、仲良くなるイベントを繰り返し開催している。



元書生の野呂岳史さん
(都市工学専攻)

本郷の防災ワークシヨップを「からつくったのが面白かったですね。」



学生のまちに目立つようになった空きアパートと地域活動に興味がある学生をつなぐNPO法人街ing（まっちゃんぐ）本郷。地域住民と学生をつなぐ活動に、今、注目が集まっている。

message



NPO法人街ing 本郷
代表理事
有限会社魚よし商店
代表取締役
長谷川 大氏
(はせがわ・だい)

町会の枠を超えた 学生支援を

本郷はもともと学生のまちだったのですが、最近は空きアパートも増えてきました。その活用方法について、学生から提案を受けて始まったのが書生生活ですが、あくまでも活動するのは学生で、彼らが動きやすい環境をつくるのが我々の仕事です。

そのためには、複数の町会や商店会を横につなげる組織が必要です。街ing 本郷は、町会と違って誰でも入れるNPO法人なので、学生だけではなく社会人も巻き込みながら、地域の担い手を増やす活動を続けています。

地域活動は 義務ではなく権利

東京都文京区のNPO法人街ing 本郷が運営する「書生生活」は、まちづくりや地域活動に興味のある学生に低家賃の木造アパートを提供する取り組みだ。減少傾向にある地域の担い手を補うことも目的の一つにある。書生生活は単なる低家賃のシェアハウスではない。まちづくりワークシヨップなどのイベントやボランティア参加を希

望する学生を地域商店会とつなぎ、活動報告会なども開催している。代表理事の長谷川大氏は「書生生活は、ボランティアの義務ではなく、『地域活動に参加できる権利』が付いた住まいです」と語る。学生は「本来、町会の枠に入っていない学生が『町の人』として見てもらえるのがうれしい」と、餅つきやお祭りなど従来の地域イベントにも運営側として参加している。

個人の幸せから地域の幸せへ

今、「幸福」に関する研究の多くは、個人の幸福感をアンケート調査し、平均をとるといった比較的単純な形で進められています。こうした研究も重要なのですが、私たちはそれに加えて、「地域全体の幸福」を測定し、地域の現状との因果関係を含めて検討する研究を2015年から始めています。

「地域」の単位は、県や市といった大きな単位ではなく、農山村地域では集落、都市部では小学校区です。そこで集落内部での挨拶の頻度のほか、隣の集落との関係、移住者などとの関係についてもつながりを丁寧に測定しています。

プロジェクト立ち上げ時には「幸せなまちは排他的ではないか？ まちが結束していると、移住者が入りにくいのではないか？」という懸念がありました。しかし、500を超える日本の農村で調査を行ったところ、結束力の高い地域ほど移住者を歓迎するという結果が得られました。地域に愛着があり、住民が信頼し合っているまちはほど開放性が高いのです。地域につながりがあると、外部を巻き込みながら地域に積極的に貢献するようになっていくのです。



京都大学
准教授
このころの未来研究センター
内田 由紀子氏
(うちだ・ゆきこ)

同一世代交流と多世代交流を うまくフレンドするのが重要

〇
〇
一
二
三
四
五



before

モクチン
レシピ

数千円でできるお手軽なものから、耐震壁などアパート1棟まるまる改修する数千万円のものまで、レシピはさまざま。



after

「チーム銀色」などのレシピを適用した改修例。ターゲットを定めず改修を行うため、結果的にいろいろな世代が入居する。

©Kenia Hasegawa

message



NPO法人モクチン企画
代表理事
慶應義塾大学大学院SFC
特任助教

連 勇太郎氏
(むらじ・ゆうたろう)

開放的な空間が作る
ほどよい距離感

「モクチンレシピ」には「くりぬき土間」というメニューがあります。共有廊下から壁を1段下げるのですが、不思議なことに廊下から距離があると開口部を開けても気にならないんです。閉鎖的だった木賃アパートが、光や風が入るようになるだけではなく、住人の生活が感じられるほどよい距離感がつくられます。

木賃アパートの魅力を高めるとともに、さりげないコミュニケーションが可能な場をつくっていききたいですね。



つねよし百貨店は、子どもから高齢者まで笑顔が集まる場所になっている。

つねよし百貨店は、子どもから高齢者まで笑顔が集まる場所になっている。

木賃アパートの改修で
人々が集まる魅力的なまちに

NPO法人モクチン企画は、木造賃貸（木賃）アパートを魅力的な空間に改修する「モクチンレシピ」を展開中。地域に緩いつながりをつくり出す原動力となっている。

「都市部を中心に、活用されていない木賃アパートがたくさん残されています。こうしたアパートとまちの関係を調整することが必要ではないでしょうか」と語るのはNPO法人モクチン企画の連勇太郎氏。2009年に「自分たちも住みたくなる住まいをつくらう」と学生プロジェクトを始め、改修メニューをレシピ化した「モクチンレシピ」を開発した。改修で生まれる開放的な空間は、住人同士が自然に挨拶をするといった、ほどよい関係性をつくり出している。

木賃アパートを資源に



©Kenia Hasegawa

モクチン企画は神奈川県相模原市の不動産会社が運営する入居者向け食堂「トーコーキッチン」のデザインも担当している。入居者が持つカードキーで開くトーコーキッチンは「同じ不動産会社の顧客」という緩いつながりが生み出す居心地のよさが好評だ。



©Kenia Hasegawa

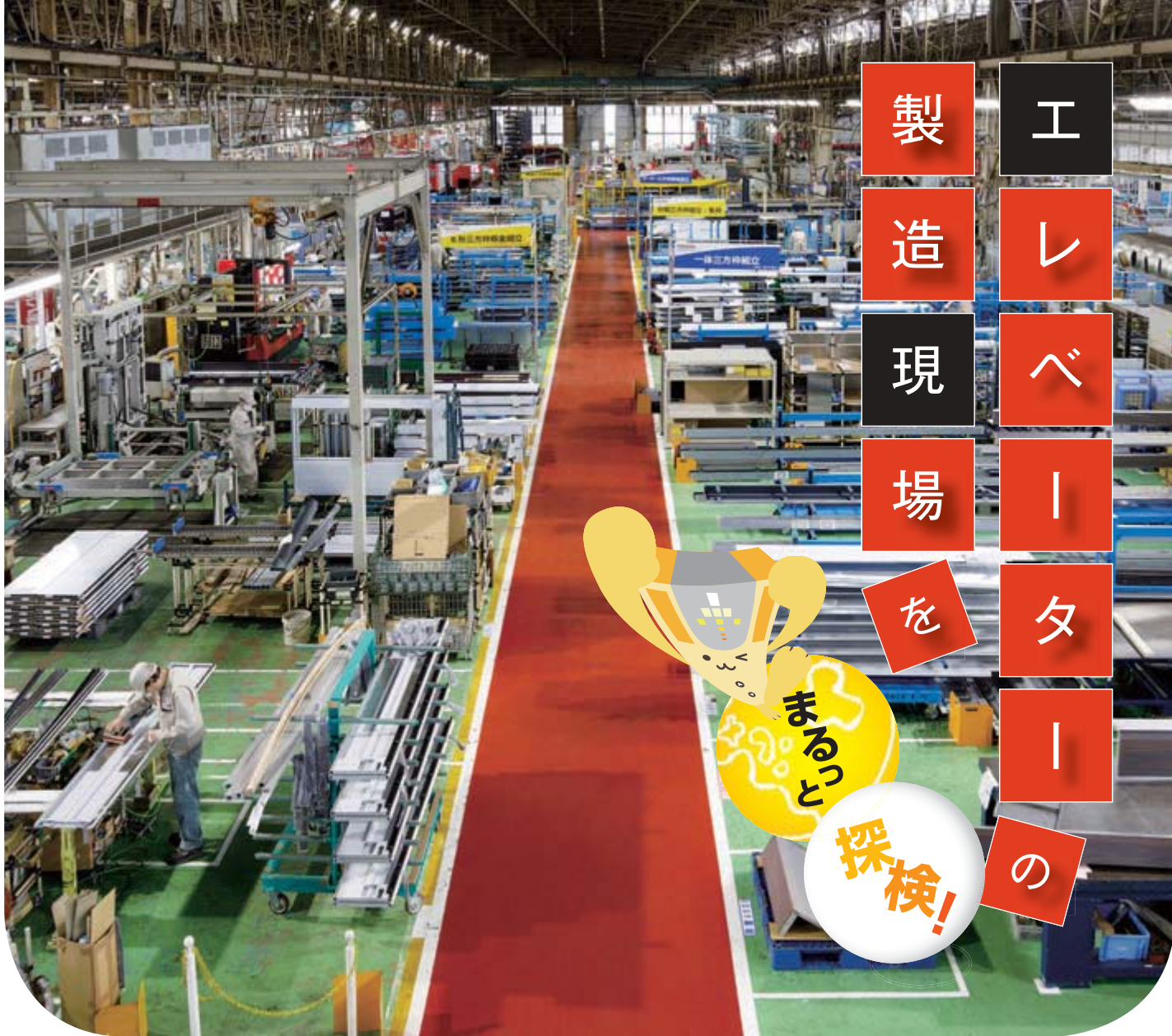
朝食100円、昼夜の定食が500円というトーコーキッチンの食事を目標に、物件探しをする人も多い。

つながりづくりには
「言い訳」が必要

こうしたつながりをつくるには、買い物や抽選会など、ちょっとした仕掛けが必要です。「集まりましょう」と言うだけでは人は来ません。今回調査を行った京都府京丹後市の「つねよし百貨店」には、店のなかにコマ回しをするような遊び場があります。「面白い物する」という「言い訳」もできるから人が集まりやすい。それにより高齢者が子どもにコマ回しを教えるような世代間交流が生まれるのです。

子どもも世代間交流のトリガーの一つです。子どもが多いと「みんなで守ろう」という意識が働き、高齢者も活動に入ります。必要に応じて、学校が定年退職した方に腕章を配り、子どもたちの宿題をみてもらう制度を用意することで、地域のつながりをつくる活動につながっていくこともできます。

まちにはさまざまな人を巻き込んだ多様性が必要です。しかし、ユニークな試みを行うためには、同じ年齢層など共通性がある人だけといった、同じ年齢層の人たちだけが集まる場も重要です。同一世代交流、多世代交流の両方をつまぐ機能させることが求められているのではないのでしょうか。



主に鉄道関連製品、産業用機器などの開発・製造拠点としての役割を担う東芝・府中事業所。モーターやレールなど、鉄道の機械構造技術、電気制御技術などはエレベーターの基礎技術と共通する部分が多いため、東芝の昇降機事業は約半世紀前、東芝・府中工場（現在の府中事業所）で産声を上げた。今回は、事業所内にあるエレベーターの製造現場（東芝エレベーター府中工場）取材し、安全・安心・快適なエレベーターづくりに携わる人々にインタビューを行った。

府中の東芝エレベーター

技能と技術の両輪

高度経済成長期の日本では、工場や事業所ビル、大規模ストア、住宅団地など、エレベーターを必要とする建築が次々と登場し、その需要は急激に拡大した。その状況を踏まえて東芝では、1964年3月、鉄道車両の開発・製造を担っていた府中工場車両部でエスカレーター製作の具体的検討を開始。これが自社技術を集めた東芝の昇降機事業の出発点となり、1966年9月、府中工場に昇降機部が発足した。

エレベーターは本来、設置される建築に応じて、求められる仕様が異なるというオーダーメイド型商品だ。たとえ規格形モデルであっても、細部に相違があるのは当然で、単純な自動化にはそぐわない多品目少量生産品とも言える。

だからこそ、エレベーターの製造には、熟練技能者の技が欠かせない時代が長く続いていた。その膨大な技能的蓄積こそ府中工場の大きな財産と言える。しかし、そんな技能者による「手づくり」工業品製造に関し、技術力を駆使することで徐々に自動化の割合を高めてきたのもまた、府中の歴史となっている。

その結果今日では、現場で磨かれてきた技能者の「匠の技」と、進化するテクノロジーを取り込む技術者による「技術革新」がちょうど両輪のように相互に連携し、今日の東芝エレベーターを支えているのである。

半世紀の歴史のなかで、東芝は日本初・世界初のエレベーターをいくつも生み出してきた。そのベースは常に府中工場にあったと言っても過言ではない。



製造部 製造課
千葉 健資
ちば・たけし
2006年入社

巻上機の精度を支える技と技術

人間の感覚は時に測定器の精度を超えることがある。エレベーターの乗り心地は高精度の加工設備と技能者の感覚に支えられているのだ。

「乗り心地に決定的な影響を与える部分は、通常、目に見えませんが、お客様が乗られるかご室の外にあるレールや巻上機の精度によって決まるものだからです」そう説明するのは製造課の千葉健資。10年以上の製造経験を持つ中堅技能者である。

「私が担当する巻上機は、電気エネルギーを運動エネルギーに変換し、エレベーターを昇降させる最重要装置です。簡単に言えば、その機械的精度がそのまま乗られる方の感じる「乗り心地」に直結するのです。」

皆さん、きつとどこかで、私がかげた巻上機の動きを知ってくださるのだという気持ちで日々作業しています。エレベーターの動きの滑らかさに気づいてもらえれば、これほどうれしいことはありませんね」



検査・塗装が済まされ、万全の状態で据付現場への出荷を待つ巻上機。

最終チェックを終え、製品を加工機から取り出し、次の組立工程へ送り出す。手慣れた作業ひとつにも気持ちを入れている。

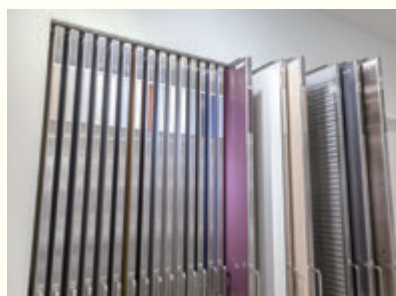


1000分の1mm単位の誤差であっても実際の乗り心地への影響は無視できない。チェックの視線にも真剣さがにじむ。



乗り場操作盤とホールランタン

エレベーターを使用する際にあまり意識されないが、必ず目に触れる部分なので、大きさや形の異なるラインアップを揃えている。



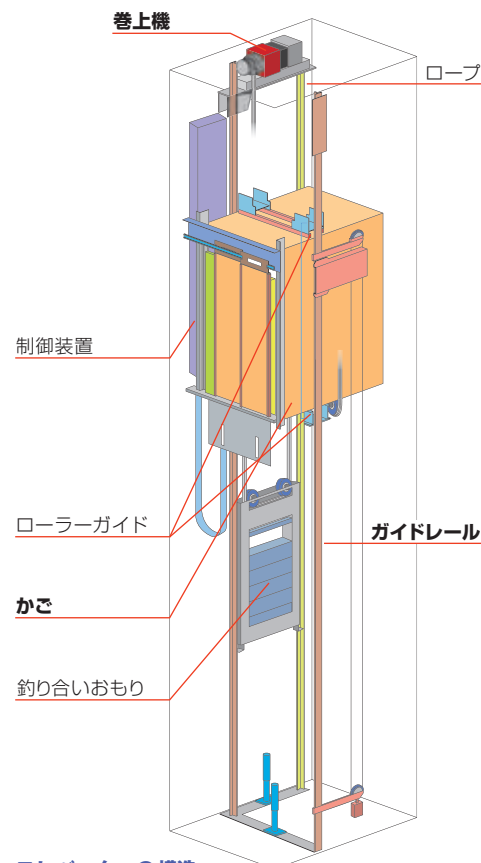
側板パネル

かご室内の大部分を覆うので、乗った時の印象を大きく左右する。標準形でさまざまなパターンや色のなかから選んでいただくことができる。

お客様の要望に応える心地よさを演出

エレベーターは構造はほとんど同じだが、実際には個々で異なって見える。それは、目に触れる部分の意匠に個性があるからだ。例えば、かご室の側板、天井、扉などは、鉄板を加工・溶接・組み合わせでつくられる。直接乗客が目にするデザインに加え、その精巧な仕上がりにこそ、技能の匠でしかないしえなない技が光るのだ。

COLUMN



エレベーターの構造

府中工場では主に、かご、ガイドレール、巻上機の製造を行っている。



製造部
生産技術担当

福永 佑吾

ふくなが・ゆうご
2010年入社



製造部
生産技術担当 参事

古川 勇人

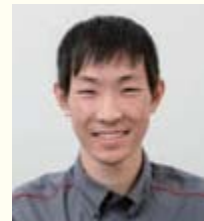
ふるかわ・はやと
1982年入社

技能を活かす自動化の追求

府中工場では、現在、最新の技術を投入して更新された3代目の新板金加工ラインが稼働している。さらなる進化の余地を残すとはいえ、かつては想像すらできなかった機械による自動化でのセミオーダーメイドを実現したものだ。生産技術担当の福永佑吾は言う。「技術者の大きな役割は、作業効率アップに直結する工程自動化を推進することです。現場で腕を磨いてきた技能者には、彼らにしかできない作業に専心してもらいたい。そのために、機械で置き換えられる部分をどれだけ増やせるかを追求しました。

私たちの仕事はラインを開発して終わりというわけではありません。より大きなサイズのパネル加工や、板金以外の工程にも自動化技術を応用展開しています。全工程を通しての自動化を追求していく、それが今の目標となっています」

そんな自動化の一例が、3次元の設計データからそのとおりの板金加工を行うシステムである。標準仕様の部分があるとはいえ、個々のエレベーターは基本的にオーダーメイド品の側面を持っている。しかし、現在のラインではその多くを自動化で製作できるようになっている。実はその実現には、府中工場ならではの



製造部 製造課

相島 貴輝

あいじま・たかき
2012年入社



製造部 製造課 技能主務

西條 潤一

さいじょう・じゅんいち
1994年入社

ゴールのない“技能”を磨き続ける

「匠の技」とは、一般に伝統工芸などを中心に耳にすることが多い言葉だ。しかし、そんな思い込みに反し、現実には多くの匠を育んできたのは、工場の生産現場にほかならない。

「技能者一人ひとりが持つ、卓越した『腕』とその『作品』。そこには完璧や終わりなどあるはずもない。つまり、目指すものはどこまでも高くなっていくんです」

府中工場で20年以上の経験を持つ製造課技能主務の西條潤一はそう説明する。「その時々々の作業環境（例えば気温）や1000分の1mm以下の鉄板の厚さのパラツキで製品の仕上がりは変わってきます。また、溶接では、見た目にはまったく差がないようでも、強度試験にかけると、結果に歴然とした違いが出るものなのです。X線や非破壊検査で調べてみて、はじめてわかるような相違を、経験に裏打ちされた感覚で現実のものにできるのが『匠』なのです」

それは技能の魅力に憑かれ始めた製造課の相島貴輝も、また同じように感じている。

「これまでは社内の技術競技会などで刺激を受け、努力して身につけた自分の技能を評価されてそれを誇らしく思ったりしてきまし

技術者と技能者が支える 安全・安心・快適



府中工場 工場長
川崎 幹
かわさき・かん
1991年入社

私は「人の手でできないものは機械を使ってもできない」と考えています。その点から言えば、技術を駆使した自動化の推進と技能の追求は、もともと同じ目標を見据えた同方向の動きなのです。ただし、それぞれの課題は異なります。

私たちのつくるエレベーターは、安全・安心・快適に動いて当然というものです。そこをスタートラインとして付加価値をつけていかなければならない、ある意味で非常にハードルの高いビジネス、そのためのモノづくりと言えます。それは同じ方向を目指す技術と技能が、それぞれの特性をより深化・発展させていってこそ、初めて実現可能になるものでしょう。技術の進歩で、技能が自動化に置き換えられていくといった単純なものではありません。両者は補完関係にあるのです。

指示されたこと、決められたことを正確・効率的に行えるのが機械の能力。一方の人間は、自ら考えることで予想以上のものをつくり出すことができます。例えば、技術の進歩によって拡大する自動化可能な部分を随時採用し、それによって生じた余裕を駆使して、技能者がさらに高いレベルの可能性に到達するというイメージです。そんな双方の得意分野を十全に伸ばし、発揮できるような環境づくりが、私たちマネジメントの役割にほかなりません。

3世代目のラインがフル稼働する現在の府中は、現場レベルの両者のバランスが大変優れています。だからこそ、技能継承の不安定要因などといった将来のリスクの芽を摘み取り、解決策を準備する——技術と技能の両輪を強化する役割の重さを常に意識しています。



府中事業所全景（1940年に府中工場としてスタートし、1999年に府中事業所に改称された）



自動パネル加工ライン

平らな鉄板に穴を開ける、曲げるなど加工。



パネル塗装

パネルに自動で吹付塗装。



立会検査場

人が立ち会い、不備がないかを検査。



巻上機製造

1台1台入念な出荷検査。



ガイドレール製造

かご室を導く高精度のレールを製造。

**地球環境を守る
モノづくり環境保全**

COLUMN

企業活動と環境問題は確実に両立させなければならぬ。だからこそ、常日頃からの環境意識の向上とともに、最新環境技術の導入が不可欠だ。例えば、東芝エレベーター府中工場では、新規ラインの導入と期を同じくして、従来の溶剤塗装を、有害物質を含まない方法に転換。いち早く全面採用したLED照明や高効率の空調機などによる消費エネルギーの低減などとともに、工場ならではの環境保全に取り組んでいる。

自動化ラインの両面テープ貼付工程。エレベーターかご室側板などに補強材や補強バーを固定する際、以前は溶接を用いていたが、この工程を両面テープで置き換えることで効率化を図った。

の利点が大きく貢献している。生産技術担当参事の古川勇人は指摘する。
「東芝の各事業・研究開発部門が集結した府中のメリットは大変大きい。他事業での自動化の実例ばかりか、アイデアや試行錯誤についても情報を共有できる

からです。それらの情報をトータルな目標＝効率化実現に向け活用していくためには、私たち技術者が自分の知識と感度を駆使しなければなりません。そこには自信があります。このラインを必ずしもっと良いものにしていきますよ」

かご室側板の部品溶接作業。スポット溶接で仮止めを施したうえで、アーク溶接で短時間に溶接する熟練技能が必要だ。

た。でもそれは、ほんのスタート地点でしかなかったんです。技能と言えるだけのものを自分のものにするためには、いくら時間をかけても、ただ漫然と作業しているだけではダメ。大切なのは向上心と問題意識です。実際の技能を磨くのは大前提ですが、そこに自分なりの工夫が加わらなければモノになりません。『どうすれば？』と悩みながら作業することを繰り返して、初めて力がつく。そこにゴールなんてないんです」

お江戸の 楽しい 歩き方

第6回

柴又・矢切周辺



門人&文
タレント／歴史作家
堀口 茉純さん
(愛称：ほーりー)

師匠
地図研究家
芳賀 啓さん

はが・ひらく・1949年生まれ。東京の古地図や地誌の研究者で、東京経済大学客員教授。テレビ朝日『タモリ倶楽部』などのテレビ番組にも出演。主な著書に『江戸の崖 東京の崖(講談社)』『古地図で読み解く 江戸東京地形の謎(二見書房)』など。

ほりぐち・ますみ・1983年生まれ。2008年に江戸文化歴史検定一級を最年少で取得し、『江戸に詳しくすぎるタレント』お江戸ル(お江戸のアイドル)として知られる。主な著書に『TOKUGAWA15(章思社)』『UKIYOEE17(中経出版)』など。

① 柴又駅



柴又と言えば映画『男はつらいよ』の寅さん！
師匠の衣装もレトロです。

② 帝釈天観光バス専用駐車場



何気ないこのスペース。かつては金町・柴又間を運行する人車鉄道(人カトロ)の線路が通っていたんですって！



昔はこの付近で、こんなに多くが、たくさん収穫できたとか。

鶯庵 やぶ忠 ●



柴又街道

柴又駅



START

③ 柴又八幡神社



駅の近くに千数百年前の時代の歴史スポットがあるなんて知らなかったな。

【壺】柴又のほうです。
「又」は「再び」again、「又」は「股」crotch、という意味だそうです。

本日の
お題

参 日本音風景100選に選ばれた音は？

壺 柴又と柴又、地名の由来がわかる表記はどちら？

貳 『江戸名所図会』に江戸川が利根川と書かれていたわけは？

④ 帝釈天参道



味のあるお店が軒を連ねる参道をブラリ。お昼過ぎにはすごい人出。

古代からの歴史がある町

今回の集合場所は京成金町線柴又駅前。江戸時代から帝釈天を中心に栄えてきた地域で、明治時代後期には参拝客のために金町・柴又間の人車鉄道が開通したそうです。

柴又八幡神社は柴又の地名の由来がわかる場所。境内の鳥俣塚の前で師匠が教えてくれました。「千数百年前、この辺りは、複数の島が点在して川筋が何股かに分かれていたから鳥俣と呼ばれていた。これが地名の由来だよ」とのこと。現在の社殿がある場所には古代の有力者の古墳があったそうです。へー！

帝釈天参道は映画『男はつらいよ』でもおなじみ。この名物の草団子は江戸時代に参拝客向けの軽食としてつくり出されました。寅さんが産湯を使った(?)井戸水で清めを済ませて本堂にお参りを。さらに入場料400円を払って彫刻ギャラリーへ。本堂外陣に張り巡らされた彫刻群&閑静な日本庭園を見学できるので、入場料の元が取れてお釣りがくるぐらい見応えがあるスポットでした。

音風景で江戸を体感

帝釈天の次にやってきたのは

5 柴又帝釈天



江戸時代から地元の人に親しまれてきた井戸水でお清め。寅さんが産湯を使った井戸水だとか。



この辺りはネギをつくっている畑が多いみたい。



風の音がよく聞こえます！
風田〜。



7 日本の音風景100選

8 野菊の墓文学碑／古戦場跡



崖の上に行くと、野菊の墓の冒頭部分に描かれたままの景色が見えました！

【参】矢切の渡し
聞こえる音。帝釈天の太鼓や櫓のせきしき、川のせせらぎなど、ここでしか味わえない風情があります。

6 矢切の渡し



法華経の教えが目で見えてわかるように彫刻されたレリーフ。芸が細かい！



自然の音に耳を傾ける。こういうのんびりした時間、大切にしたいですね。



柴又、矢切の地名の由来がわかって、充実した1日でした！



GOAL 矢切駅

江戸川の春まっすぐに遠い音

若緑風賑やかに渡し舟

今回の締め的一句

江戸川の河川敷。江戸時代から続く渡し場、矢切の渡しです。舟渡しが残るのは都内でここだけなんだとか。「現在も人力で運航しているのでもっとも静かなのがポイント。自然の音がよく聞こえるから耳を澄ませて「ごらん」と師匠。考えてみれば、自然の音は江戸時代と変わらないはず。当時の人々と同じ音風景を体感できたと思うと、とっても貴重な経験でした。対岸の千葉県に入ると一気にのどかな雰囲気。広い畑の新鮮な野菜のかたわらにはこの界限を舞台にした小説『野菊の墓』にちなんだモニユメントが点在しています。戦国時代の大合戦の舞台になった国府台の崖には古戦場跡の碑が。この合戦の戦死者は1万人余りとも言われています。近くの矢喰村庚申塚の解説板には、弓矢を使った戦はこれき（切）りにしたいという地元の方の願いが矢切の地名に込められていると書かれています。地名に歴史ありですね。





✈ カール・ベンクスさん
建築デザイナー

③ ドイツ連邦共和国
ベルリン 編

ニッポン

見た

異国の目から

Karl Bengs ● 1942年ベルリン生まれ。幼い頃から日本文化に関心を抱く。来日後、日本家屋をドイツに移築する仕事を始める。1993年新潟県十日町市竹所(なけところ)で古民家を購入、改築して自宅とする。1998年カールベンクスアンドアソシエイトを設立し、古民家再生に取り組む。その功績で平成28年度ふるさとづくり大賞内閣総理大臣賞を受賞。

現在、新潟県十日町市に建築設計事務所を持つカール・ベンクスさんは、1942年ベルリンに生まれた。ベンクスさんが生まれる一カ月前に、彼の父親は亡くなっている。父は大の日本通で、多くの日本に関する本を所蔵し、浮世絵・印籠・根付などのコレクターであったことから、それらに囲まれて育ったベンクスさんにとっては、もとより日本は親しい国だった。

初来日の理由はユニークだ。西ベルリンにあるインテリアのデザイン事務所に勤めていた彼は、ある日、テレビで見た空手の番組に釘づけになった。何てかっこいいんだろう。柔道は小さい頃に習ったことはあったが、空手は見たことがなかった。パリに空手を教える日本人がいると聞くと、いてもたってもいられず、会社を辞めて単身パリへと向かった。21歳の時である。「うれしいことに、空手の先生の望月稔師は、私の弟子入りを快く認めてくれ、私はアルバイトをしながら

インテリアデザインと空手と

職人技が残る古民家に
再び息を吹き込む



ベルリン / 基礎データ

●面積：約892km²
●地理：ドイツ連邦共和国にある16州の1つで、ドイツ北部に位置する。地形は平坦で高い山はなく、都市部周辺には森林が広がっている。

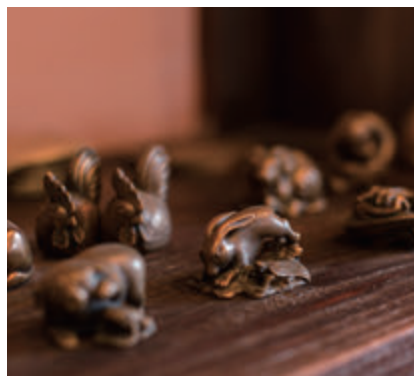
●言語：ドイツ語
●歴史：ベルリンは第二次世界大戦後、ドイツ民主共和国の建国に伴い東ベルリンと西ベルリンに分断された。1961年には東と西の間に強固な壁がつくられたが、1989年に壁が崩壊、翌年東ベルリンがドイツ連邦共和国に組み込まれる形でベルリンは1つに統一された。



ベルリンの街並み



ベンクスさんが1970年前後に手がけていた展示会のインテリア。



ら道場に通り、空手家になることを夢見ていました」
 やがて「強くなるには日本で修業をしなくては」
 と思うようになったベックスさんはお金を貯め、
 1966年に日本を訪れたのだった。幸い、友人の
 おかげで日本大学空手部の道場に通わせてもらうこ
 とになった。しかし、在日ドイツ商工会議所の紹介で、
 晴海の国際見本市会場や大阪万博ドイツ館などでイ
 ンテリア関係の仕事をするようになると、次第にそ
 ちらが忙しくなった。

古民家、職人技との出会い

1972年、いったんドイツに帰国したベックスさ
 んは、デュッセルドルフに居を構えると、以前から考
 えていた日本家屋を移築する仕事に携わるようになった。
 ある時、古民家の移築を依頼されたベックスさん
 は、新潟で今にも倒壊しそうな物件と出会った。なか
 に入ってみると、基礎と素材は素晴らしく、一遍で気
 に入ってしまった。結局、クライアントとの折り合い
 はつかなかったものの、彼は自分のためにその家を
 購入し、職人の手を借りて大幅な改築を行った。

「日本の古民家は、職人の技でつくられています。
 日本の職人は木が持っている性質をうまく利用して、
 地震にも強い家を見事につくり出しているんです」

ベックスさんは自宅の改築から古民家のよさに開眼
 し、以後軸足を新潟に定めて古民家再生の仕事に傾注
 するようになった。もちろん、古民家がそのまま使え
 るわけではない。「現代に合わせて古いものと新しい
 もののバランスを取った改修が大切だ」と言う。

しかし、ベックスさんが今取り組んでいるのは、単
 なる古民家改修だけにとどまらない。古民家改築を
 通して、彼の住む新潟県十日町市竹所全体を活性化
 させようとする集落再生プロジェクトも熱心に進め
 ている。これまでも、古民家をシェアハウスに改築し、
 一人でも多くの若者が来るような仕組みづくりなど
 を手がけてきた。

ベックスさんの試みが、今後この町の姿をどう変え
 ていくのか、10年後、20年後が楽しみである。

ドイツと
 日本の都市は
 ここが
 違う！



ベルリンでは戦後、古い建物を守る
 法律ができ、築百年以上の建物は
 許可なく壊せなくなりました。その
 ため伝統的建築にはエレベーターが
 なかったのですが、最近建物の外
 にエレベーターを設置しているところ
 も増えています。

以前は、パターノスターという旧
 式のエレベーターがありました。2
 人乗りの小さな箱が、上下方向に常
 に動いていて、利用者はそこに飛び
 乗る形式になっています。危ないとい
 う理由で廃止が決まり、新たに上
 下することはできませんが、今も市役
 所や大学などで見かけることがあり
 ます。

もちろん、高層ビルではエレベ
 ーターを取り入れています。どこに
 行ってもエレベーターがある日本の
 ようには発達していません。



©Ludek

ヨーロッパでは、一部の建物でパターノスター
 が現在も稼働している。ドイツはパターノ
 スターの世界一の保有国だ。

かんはる 地方都市

第13回

富山県射水市内川地区



1つつづつ場をつくり、 「日本のベニス」を再生

株式会社ワールドリー・デザイン
代表取締役

明石 あおいさん あかし・あおい

移住した人は、地元の仲間

に入れていただくという

意識を忘れないことが大切！

株式会社地域交流センター企画
代表取締役

明石 博之さん あかし・ひろゆき

自分自身の直感を信じて、

一歩ずつ進んでいくことかな。



富山県観光・交通・地域振興局
地域振興課 課長
みやざき・いちろう
宮崎 一郎さん

まちづくりには時間がかかり
ますから、地道にやり続ける
ことが大事。

内川地区への熱い思いが 伝わるマップ

「日本のベニス」と言われる内川地区の景観をひたむきに愛し、辛抱強くPRしてきた富山県庁にお勤めの宮崎 一郎さん。そして、東京からこの地に移住してきた明石博之さん・あおいさんご夫妻。この3人の出会いは、1枚のマップがきっかけだった。

「この地図、すごい。空き家まで全部の家が描いてある」

いち早く、マップ「新湊内川まち歩き絵図」の素晴らしさに気づいたのが、編集の仕事をしているあおいさん。2010年のことだった。そして、このマップを製作した人こそ、宮崎さんだったのである。宮崎さんは二十数年前から足し



TOPIC

射水市と高岡市を結ぶ万葉線では、不定期で「ドフえもんトラム」が走っている。作者の藤子・F・不二雄氏が高岡市出身だったことにちなんだ取り組みで、漫画を活かしたまちづくりは宮崎 一郎さんらが発案した。車両のペリスカラーは青で、窓にはドラえもんキャラクターの線画が描かれている。

げく内川地区に通い、地元の人たちに景観の素晴らしさを伝え歩いた。一方、対外的には映画のロケ地としての魅力を全国に発信するなど、さまざまなアイデアを实践。一軒一軒の家の形まで丁寧に描き、知りたい情報を吹き出しで書き込んだマップづくりも、その活動の一つであった。

一軒の家が移住のきっかけ

「すごいー」と叫んだあおいさんの言葉につられ、マップを覗き込んだ博之さんは、ある一軒の家に心を奪われた。「空き家と書いてある、この六角形の家、すごい気になる」とその日のうちに室内を見学。案内人から壊されるらしいという話を聞かや「俺、ここでカフェやるわ」と呟っていたという。



万葉線の発着地の高岡市では、鋳物の町・金屋町の千本格子が見所。写真は、立ち寄りスポットの大寺幸一郎商店の皆さん。



藻谷浩介の ここがポイント!

奇跡の偶然で残されてきた内川の町並み。文化財でも有名観光地でもないけれど、日本屈指にいと美しく美しい水辺空間です。その価値に気づいた県職員と一部地元民の思いに移住のご夫婦が応え、保全と活用の輪が広がっていく。あなたもこの素敵な展開を目撃しませんか?

もたにこうすけ ●日本総合研究所 主席研究員。日本の全市町村を訪問し、地域特性を多面的に把握。登壇・出演・寄稿等は年間1300件を超える。著書に『里山資本主義』『しなやかな日本列島のつくりかた』など。



博之さんが経営するカフェ「uchikawa 六角堂」。カフェで働く若者4人のうち、3人が県外からの移住者。



空き家を改修して2016年4月に完成した「ma.ba.lab.」は、明石さんご夫妻のオフィス。空き家相談も受付中。



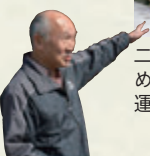
2016年7月にオープンした貸衣装屋「KIPPO」。「六角堂」の雰囲気を感じたオーナーが博之さんに町家改修のプロデュースを依頼。



内川地区を「日本のベニス」と初めて呼んだのは藻谷浩介さん。東(あずま)橋の上からの風景が最高。



宿泊料は
1泊1人
1000円
です。



二口紀代人さんが専務理事を務めるNPO法人水辺のまち新湊が運営する移住希望者向け滞在施設。



内川地区の代表的な建物・旧渡辺邸を改修し、2016年10月にオープンした「番屋カフェ」。映画「人生の約束」『RAILWAYS』のロケ地に。その誘致には宮崎さんが尽力。

宮崎さんが中心となって製作された「新湊内川 まち歩き絵図」。現在は別エリアも加わり4枚セットに。



2016年9月にオープンした工房「Glass Beads Factory 蜻蛉(トンボ)玉」。NPO法人水辺のまち新湊のスタッフらの働きかけで実現。改修前はガレージ。



さらなるステップへ

「2冊の取材を通じて、大好きな町並みが少しずつ失われていくのを実感しました。ただ見ているのが悲しくて、何かお手伝いがしたいと思ったんです」という、あおいさんの思いもあり、2016年、明石さんご夫妻は内川地区に移住した。

まちづくりの仕事に携わっていた博之さんは、カフェ経営の経験などまったくなかったが、2013年には、カフェ「uchikawa 六角堂」をオープンさせた。

一方、富山県がふるさとのおおいさんは、情報誌「itona 第1号 女子13人分の富山」で編集長兼内川地区を担当。きめ細かな取材を繰り返し、執筆した。

さらに、この情報誌を見た地域のまちづくり団体・NPO法人水辺のまち新湊からの依頼で、情報誌「内川さんぽ」を製作。どのページを見ても、あおいさんの内川地区に対する愛情が溢れている1冊が完成した。

そして博之さんは、内川地区の美しさを愛し、守ろうと思う仲間が集える「場」づくりを開始。町家オフィス「ma.ba.lab.」、レンタル着物が楽しめる「KIPPO」などをプロデュース。今年はゲス



内川から少し内陸側にある老舗食堂「スパロー」。店の一押しメニュー「カレー中華」は、地元出身の落語家、立川志の輔師匠の思い出の味だとか。



トハウス2軒と、アメリカ人が経営するバーも手がける予定だ。

「1軒、2軒では何も動かないけれど、3軒になると仲間も増え、町に動きが出てきました。まちづくりの次のステップに進めた手応えを感じています」とうれしそうに語る博之さん。

「古い家に住む人、古い家を建て替える人。どちらもこの町の一員です。まちづくりは、そんな方々の思いも大切にしながら進めなければいけないと思っています」と深い思いを語るあおいさん。

そんな明石さんご夫妻の活躍に「内川地区は、もう、このお二人がいれば大丈夫です」と語る宮崎さんは、現在、高岡市全体を伝統工芸の町として全国に発信。工芸体験のできる町を目指して、今日も走り回っている。

コラボで生まれ変わる
伝統工芸

第1回

能作

クラッソン・コイヴィスト・ルーネ

CLAESSON KOIVISTO RUNE

クラッソン・コイヴィスト・ルーネ

1995年、スウェーデン・ストックホルムに設立された建築・デザインユニット。建築とデザインに等しく重きを置く複合的な活動を展開し、国際的に評価されている。世界中の80以上の企業にデザインを提供しており、受賞も60以上に上る。

www.claessonkoivistorune.se



能作

1916年、富山県高岡市にて仏具を中心とした銅合金鋳物を製造開始。以後、鋳物メーカーとして、伝統的な技を守りながら、錫(すず)を100%使用した商品を生み出す。2017年4月には、年間5万人の見学者を受け入れる、産業観光に力を入れた新社屋がオープン。鋳物製作体験ができるスペースや限定品も取り揃えるショップ、地元食材を使ったカフェは、地元の人にも大人気。

www.nousaku.co.jp



今回の逸品

テーブルウェア

「TSUBAKI」

富山県高岡市

©Sohsei Oya (Nacisa & Partners Inc.)

大きさの違う皿を5枚重ねることで、椿の花をイメージさせた画期的なデザイン。

伝

統とは革新し続けること。それを実践している鋳物メーカー・能作は、2007年、経済産業省から地域資源産業活用事業計画第1号に認定され、それを機に販路を拡大。海外にも直営店を出店するなど、国内外で人気がある。

そのような活動がきっかけで、伝統に根ざした技術を国内外に広げることを目的としたジャパンクリエイティブの担当者から「クラッソン・コイヴィスト・ルーネのデザイナー」とコラボレーションしませんか」という提案をされた。

「錫という柔らかく、曲がりやすい素材を見て、日本のイメージをどうデザインしてくるか、とても楽しみでした」という能作克治(かぢ)社長は、デザインを見るやゝ重なるという画期的な発想の面白さに魅力を感じた。しかし、一番外側の皿の直径が29cmとビッグサイズだったことには驚愕したという。

「できない」と言うことが大嫌いな能作社長は、日本では、あまり使用しないビッグサイズの皿づくりに、果敢にチャレンジ。半年間、試行錯誤を繰り返して、デザイナーの要求に添える逸品に仕上げた。

この経験から、能作社長は「海外にシェアを広げるには、その国の文化や風習、習慣を捉えて商品をつくること。そのためには、その国の『当たり前』を一つでも多く知ることが重要なのだ」ということを改めて実感したという。

そんな能作社長の次なる目標は、「共に造る、共に思う」という姿勢で取り組み、鋳器をブランド化し、高岡市全体を鋳物の町として、国内はもちろん、全世界に広めることだという。



©Sohsei Oya (Nacisa & Partners Inc.)